

# 教育事件の社会的背景

鳴瀬 彰夫

教育事件とは、新聞やテレビ等の報道で取り上げられ、その時々で話題になった事件で、教育、学校をめぐるものを指している。

授業で教育事件を取り上げる際の課題として、「教育事件をとおして、学校という場、現代の子どもたちの世界を読み解くこと」をあげたい。

この課題設定から、特に重要なのは、個々の教育事件を「特殊」ではなく「典型」としてとらえることである。

活火山は、けっして地表の平均的なサンプルではない。しかし、活火山から噴き出した溶岩を分析することによって、地球の内部を知ることができる。目に見えないマグマの状態を知る有効なデータになり得る。

同じような意味で、教育事件を通していまの学校の状態を理解することができるのではないか。学校の中で行われている日常を知るうえで、有力な手がかりを得ることができるのではないか。

教育事件は、下に隠れているさまざまな事柄からなる氷山の一角である。それは「特殊」ではなく、そこで生きている生徒たちの状況の一つの「典型」ととらえられる。その姿勢で問題を取りあげることとおして、事件の背景、現実の教育現場の実態を知ることができると思う。

## 開成高校生殺人事件

1977年10月30日の未明、家族に乱暴し、家

庭内暴力に手に負えなくなった高校2年生の、一人息子A少年を、思いあまった父親が自宅で絞殺する。裁判において、一審判決文では「息子の回復に絶望し、息子の将来を心配し、疲労困憊している妻や祖母の苦悩を救おうとして犯行に及んだ」と述べられている。

A少年は、中学時代はまだ成績は上位にいたが、高校に入ると下位に下がってしまう。彼にとって、人間の多様性は、「成績」というたった一つのモノサシに支配されている。このモノサシがすべての基準になっていたA少年にとっては恐るべき事態であつたに違いない。

A少年の「家庭内暴力」はすごいものだった。A少年は、学校ではむしろおとなしかったという。家に帰り着くやまず大声で泣く。「人を殺したい気持ちをガマンしておさえて、やっとの思いで帰ってきたので泣くのだ」と本人は説明した。そして大暴れが始まる。手あたりしだい物を投げつけ、家族を殴り、蹴飛ばす。攻撃の相手はおもに、家にいる母親と祖母に向けられた。外に逃げ出しても追いかけて水をかける。物を壊す音や叫び声が毎日のように近所に聞こえたという。しかし、手はさしのべられなかった。家族が孤立している。

社会学者の見田宗介は1960年代から70年前半にかけての「高度経済成長期」に着目して、この時期に現代の日本の骨格がつくられたと述べている。（『社会学入門』2006年 岩波書店）

社会構造の根底から変わった時代。この変動は家族の形を変える。農村共同体とならんでそ

れ以前の社会の根底をなしていた大家族制から核家族への変化。人びとは農村から都会へと流れ込む。アトム化した家族の形態で。

この急激な変貌のひずみがこの頃に現れてきたと捉えることができる。

孤立したこの家族の状況は、その中に位置づけるのではないか。

### 金属バット両親殺害事件

1980年11月29日、神奈川県川崎市に住む20歳の予備校生が、両親を金属バットで殴り殺した事件。

彼は、高校入学時から成績が落ち始め、早稲田大学などの受験に失敗、予備校へ通うが成績は伸びない。結局、浪人1年目も受験に失敗。父親に大学受験をあきらめることを勧められるが、なんとか二浪することを許してもらう。だが、精神的負担はますます増大し、大学に入ることもおぼつかない状態であった。レコードを買うために父親のキャッシュカードを無断で使用したり、酒を飲んだりするようになる。事件前夜にこの行為が両親に見つかり、叱責され、けられる。「明日中に追い出してやる」と父に言われ自分の居場所を失ったと感じた予備校生は数時間後の翌朝未明、酒を大量に飲んだあと、金属バットで両親を撲殺した。

この事件もまた、川崎の新興住宅地で起こっている。核家族化した一家で起こった事件である。

日本の住居は、ふすま、障子を基本に仕切られている。部屋は鍵がかかるとなっていないことが多い。他の人間が尊重することの信頼にもとづいて家族は生活している。つまり、家族はお互いに殺そうと思えばたやすく殺せる関係である。そのことをこの事件は明らかにした。この事件に恐怖を感じた親たちも多かったはずである。

この二つの事件は、家族と教育の接点に起き

ている。

### 横浜「浮浪者」襲撃事件

1983年、2月5日「浮浪者」須藤泰三さん(60)が横浜市の下山公園で何者かに殺された。この事件から、次々に浮浪者襲撃の実態が明るみになり、10人の少年が逮捕された。

少年たちは、1982年暮れから83年にかけて横浜市中区の関内駅周辺や山下公園で野宿していた人たちを次々と襲い、ほぼ30件の襲撃を繰り返していた。犯人は、市内の中学生5人を含む10歳から16歳までの少年10人。

逮捕された少年たちは「胸がスカッとした」「おもしろかった」と語ったという。このことを聞いて、「なんという子ども達か」と憤りを感じた人が多い。

実は、当時「横浜さわやか運動」なるものが商店街、市、警察が一緒になって実施されていたことがその背景にあった。ミナト横浜のロマンチックなムードをつくりだすため街をきれいにする運動—ゴミをなくすことを目的にしていた。記号論的に言えば、「ゴミ」と「浮浪者」は等価になる。街の美観を損ねる「浮浪者」を排除するのが目的の一つであった。そうした運動を見て育った少年たちは、大人達のやっていることの代わりを務めたという意識だったのである。

また、「浮浪者」は「社会の最低限の義務を果たさないものは、あんなふうになってしまうのだよ」という記号でもある。この記号は、市民社会からの逸脱を禁じる機能を果たす。

### 横浜 小学5年生の飛び降り自殺

1985年2月16日、横浜市金沢区の団地の13階から、担任の教師に叱られた小学5年生の杉本治君が飛び降り自殺した。前日「学校が破滅すれば先生も子供も楽になる」と級友と話して

いたのが先生に伝わり、級友の前で約1時間わたって「そんなことでは将来、精神病院に行くことになる」と詰問された。

飛び込んだ13階と14階の間にある消火栓保管箱には、黒のフェルトペンで書いた

「マー先のバカ、サーくん、キーくん、ターくん、ケーくん、オーくん死去 S・60・2・16・12・24・32」の、遺書ともとれる落書きがあった。

遺書の最後の部分は「オーくん(自分のこと) 死去 昭和・60年・2月・16日・12時・24分・32秒」である。治君は繊細な少年であった。

彼の書いた作文の中に「学校に行ってしあわせになるかだ。一段ずつ上の学校に行かなければならない。一番の会社に行って社長になってどうなるのだ。ただとしをとっていだけだ。能力もおとるし、会社を自由きままに動かしてどこがおもしろい」の文章がある。

小学5年生にして、自分の人生を「見通して」いる。

不透明な中で「可能性」という夢を育てていくのが、人間の成長の姿であろう。希望というものは、「見えないところ」から生まれてくる。あまりにも早く未来を見通すことを強いる社会は、子供に人生を矮小化して見せている。

## 愛知 中学2年 大河内清輝君のいじめ自殺

1994年11月27日深夜、西尾市の市立東部中学校2年の大河内清輝君(13歳)が自宅裏庭のカキの木にロープをかけ首吊り自殺。姿の見えなくなった息子を探していた母親が発見。さらに死後、自室の机から「いじめられてお金をとられた」という内容の遺書が見つかり、その悲惨ないじめの内実が明らかになった。

同級生11人がいじめに関わっていることが判明する。小学6年生の頃から大河内君にたびたび暴行を加え、金を要求していた。脅し取った金額は少なくとも110万円と報道されている。

恐喝、つまり犯罪を呼び込んだ事件であった。この事件をきっかけとして全国各地からいじめの事実が寄せられて、社会問題化する。

いじめる側、いじめられる側の顔がはっきりと見えて対峙していた段階から、現代の「いじめ」はいじめる人間がはっきりしないようになる。

いじめに来る相手の顔は見えるにしても、その向こう側に何か得体のしれないものが働いている。いじめられている者にとっては、クラス全員が自分をいじているように感じられ、追いつめられるのである。そして「明日は我が身」の不安が、さらにいじめの関係を陰湿なものにしている。

教育事件全体の流れをおさえておきたい。これは一応のものである。

1970年代の半ばから家庭内暴力が注目されるようになる。80年に入ると校内暴力が激しくなり、それに対応して、教師の側からの体罰事件も起きるようになった。

いじめは、かなり広い時期で問題化している。1986年の中野富士見中学校の鹿川裕史君のいじめ自殺事件などが社会的に注目された初めの事件といわれるが、80年後半に「いじめをなくせ」ということが声高に主張される。

90年に入ると不登校が問題化し、さらに90年の後半には学級崩壊が注目を集める。

あくまでこれはアウトラインにすぎないが、そこにふたつの傾向を見てとることができる。

ひとつは対象とする生徒の範囲が広がっている点である。学級崩壊にいたっては、クラス全員が関わることになる。

第二の点は、次第に見えにくくなっていることである。いじめは確かに昔からあったといわれる。しかし、その質が変わってきていたのである。1対1の関係から、1対多の関係になり、「シカト」に典型的に見られるが、いじめられる役回りは特定の間人が負わされるものでなくなってきている。「いじめ」は教室の中に構造

化されていると言えるのかもしれない。

授業では、当時の新聞記事をたどり、事件を取材した本を手分けして読んだり、事件を扱ったドキュメンタリー番組を全員で見たりした。

自分の体験とつぎ合わせた議論が印象的であった。